

山首上人さまご講演

仏ぶつ
智ち

心の重心こころ じゅうしん



ナadeshiko

人の幸せにつながる菩薩行を実行しましょう

仏智

「愚痴多き者には智慧の心を起こさしめ」

(無量義經十功德百品)

この世の中、不平を思い、不満足の日暮らしをする人は、随分多いのであります。

これらの人々は凡智といって、要領よく暮らそうという、ただ自分のことしか考えない、哀れむべき人たちであります。

仏様は、このような人たちにも、仏と同じ智慧を得させて、涅槃の樂を得させたいと

念じておられるのであります。

|| 御開山上人御法話資料 ||

「仏智」は六波羅蜜の一つで、仏さまのよ
うな広い智慧のことを言います。その智慧
を得させたいと仏さまはおっしゃいますが、
それにはそれだけのことをしなければなり
ません。

まず第一に心掛けてゆくべきことは、あ
りがたい、という心を持つことです。

「ありがたい」という心が持てると、重心が出来ます。ドシツと心が落ち着いてくるのです。

心というものは、ふらふらゴチャゴチャしているかと乱れてきます。放っておくとどこに行くかわかりません。いくら動かないようにしようと思ってもコロコロコロコロ動いてゆくのです。そうさせないためにも「ありがたい」という心を持つことです。いろいろ思うようにならないことはあっても「こうして生かして頂けるのはありがたい」と思えると、自然に心は落ち着き、安心して生きてゆけると思えます。

生きているから当然とも言えますが、人には悩みや思いがいろいろついてまわります。「あれが足りない。これも足りない」というように「ありがたい」とことと逆の、困ったことばかりが出て来ますし、目につきまします。

どうしてそうなるかという点、心が狭いからです。心は狭いのには欲は広く、深いものからです、思うようにならないことが次々に起きてくるのです。端から見ると「あの人幸せだな」と思える状態にあっても、本人は「とんでもない。まだまだ足りない」と思っているかも知れません。人の目にど

う写ろうと、本人が満足できるかどうかは別なのです。

「仏智」のある人は、心の広い人です。一つでも嬉しいことがあればそれでもう、喜びがたい」と喜んで生きてゆける人です。

喜んで生きるということは、生きることが楽しいということでもあります。

「生きることに楽しい」と喜んで生きられるか、逆に「あれもない。これもない」と愚知・不足いっぱいの日々を送るかによって人生は大きく変わります。

「不平・不満の多い人は『凡智』の人で、自分のことしか考えない、哀れむべき人」

と言われています。三徳を教えられる私共がそういうことを言われてはいけません。日々正しい生き方をしたいものだと思います。

仏さまのおっしゃる「涅槃の樂」の涅槃とは、迷いも煩惱もすべて滅し尽くした安らかな境遇」という意味であります。肉体がある以上「老・病・死」の苦しみはついてまわりますから、完全な涅槃は望めないかも知れません。

お釈迦さまは八十歳で亡くなりました。その少し前、腰や背中が痛いということを言われた、と経典に記されています。

今と違って当時は自動車などはありませんから、どこに行くにも自分の足で歩いて行かなければなりませんでした。悟りを開かれたお釈迦さまでも、年とともに足腰が弱り、辛いこともおありになったのではないかと思います。

あれをしたい。これをしたい」という欲は別として、生きている以上、思うようにならないことはあるものです。しかし、どのような状態にあっても、それでもありがたいと喜べる安らかな日々が送れたら、涅槃の樂が得られたと言えるでしょう。

ところで、ありがたい」といふ心があれ

ばそれで十分かと言うと「凡智」の悲しさ、それだけではまだ足りないことがあるように思います。それはありがたいけど、これがだめだ」と、気に入らないことにすぐ気がゆくのです。主人が元氣なのはありがたいけど給料が安い」とか、子どもは元氣に学校に行くけど成績が悪い」といったことです。

これも「仏智」がないからと言えますが、給料が増えれば当然、仕事もきつくなり、気苦労も多くなつて、また新たな悩みが出て来るものです。

子どもの成績も苦になることではありま

すが、成績がすべてではありません。

私の高校時代の友人に、成績がいつもビリに近い人がいました。結局、高校を出てすぐ就職しましたが、それから力を発揮して大成功を納めました。今は子どもさんが後を継いで、安楽な人生を送ってみえます。学校の成績が良くても社会に出たらだめ、という人はいるものです。逆に、成績は悪かったけれども社会に出てからめきめき頭角を表わして出世した、という人もいます。今という短い時間の中で決めつけるのではなく、長い時間の中で見てゆくことが大切です。

私共どうしても目先のことだけを考えて

いいとか悪いと言いますが、そうすると結果を見誤ることが往々にしてあります。ゆったりと「仏智」を基にして、いろいろなことに対処してゆくことが大切です。徳さえ積んでいれば必ずいい結果が出るのですから、取越苦労はしない方がいいと思います。

——「徳」につながる働きを——

皆さんどなたも、様々な形で仕事をしてみえます。お金がもうかるかどうかは別として、働いておられます。その働くことに

ついでお釈迦さまは、いくら一生懸命働いても、その働きが菩薩としての大事な働きでなければ、本当に働いたことにはならない。というように言われています。杉山先生がいつも、私共は菩薩行をするために生きてゐると言われていたのはこのことです。

日常生活の中、言葉で、心で、行ないで、少しでも周りの人の力になろう、徳を積もうという心で働かなければ、それは自分のためだけの働きであって、仏さまのお心に叶った菩薩行にはなりません。

これは大学時代の友人のお話ですが、一

人とてもユニークな人がいました。人相が悪く、顔などと言ってはいけません、何となく怖い顔をしているので人にあまり良く思われていませんでした。とつつきが悪いと言うのでしよう、特に初対面の人の評判は良くありませんでした。でも、付き合いを重ねてゆくうちに、実に細やかな心遣いのできる人、ということがわかって来ました。ちよつとした言葉・行動が人に喜ばれ、卒業の頃には大勢の友人に囲まれる人になっていました。第一印象は悪かったのですが、人を心から思いやることの出来る優しさに、人は引かれたのです。いつも変わることに

ない思いやりの心で人に接してゆくことの大切さを、その人から学ばせてもらいました。

とにかく、自分のことだけを考えていてはいけません。今自分のしようとしていることが人の役に立つかどうか、人が喜んでくれるかどうか、そして、徳を積むことにつながるかどうか、そうしたことも「仏智」が基本になってゆくとおもいます。

結婚して子どもが出来る人と誰もが、いい子が産まれますように、と仏さまや神さまにお願ひします。とても大切なことですが、自分の子どものことだけを思つての願ひで

はいけません。本当にそう願うのなら、それだけの働きをしなければなりません。自分の立場を通して、仕事を通して、言葉で、行ないで、親が率先して菩薩行を実行するのです。

ここに一つ大切なことがあります。言葉と心と行ないの三つが揃わないと、本当の意味での菩薩行にはならないということです。

口でどんなにいいことを言つても心が伴つていないと、自然に表情に表われます。引きつったような顔では何を言つても、素直に受け取ってもらえません。

目の施し、顔の施しが説かれますように、

優しい目、にこやかな顔付きが大事です。

その上に優しい言葉がかけられたら万全で

す。自分がいることよって周りの人がホ

ツと出来るような、そんな存在になれたら

どんなにいいでしょう。自分には菩薩行を

して世の中の人を力づけ、喜ばせてゆく使

命を帯びた者である。という自覚をいつも

忘れないようにしたいものだと思います。

自分の生きることです。少しでも周りの人、

縁ある人の力になり、その人の幸せにつな

げてゆくのでなければ「仏智」の具わった

菩薩行とは言えません。

そんなむつかしいことと思われるかも

知れませんが、決して、特別なことをしな

さいというのではありません。今の自分の

立場を通して、仕事を通して、あたりまえ

のことをあたりまえにすることが基本であ

ります。

お父さんはお父さんとして、お母さんは

お母さんとして、子どもは子どもとして、

あたりまえのことをきちんとすることです。

その上さらに、言葉で心で行かないで、施し

が実行できたら言うことありません。